

獨立心の養成

文學博士 下 田 次 郎

教育といふものは、人を獨立せしむる爲の準備である、と云つてもよろしいのであるから、それには其のつもりで小さい時からなるべく子供の獨立心を養ふことが必要である。ところが、富有の家庭になると、さか多々の召使を置いて、子供の用をさせるものだから、子供が自分ですればよい事をも、女中がひきこつてする。其をしなければ女中の用はないのであるから、出されても仕方がない、女中にとつては、子供の世話をしなければならん事になる。従つて、小さい時から子供は、たゞ人にのみよりするがくせがついて、成長してからも、自分では何も出せず、總て人の手を借らねばならぬやうな事になる。さう云ふ風にして育てられた少女があつて、或人が「若し火事があつたらどうしますか」と聞いた所、「ベルを押します」と云つた話がある。火がついて來ても、自分は人の來る迄待つてゐるつもりと見える。さう云ふ少女が、他日家庭の主婦となり母になると、

家庭は少しもおさまらず、母としてのつとめも出來はしない。それで、富有の家庭でも、小さい時から女の子は、かひなく働いて、自分の事は自分の力にかなふ限りは、自分でする習慣をつける事が必要である。男の子でもその通りで、人手はあればありしだい、なければなくてもすむことが多いものであるから、なるべく人の手をわづらはさず、自分でするやうにしたものである。

これは或る上流の子弟の話であるが、或時修學旅行をした時、一人の生徒は風を引いた。それは家では湯からあがると、召使がタオルを持つて待つて居て、體をふいてくれるので、宿屋でもさうと思つて、湯から出てぬれた體で立つてゐたものだから、風を引いたと云ふ事である。いま一人の生徒は、のどに魚の骨をたて、苦しんでた。それは家では魚を出すのに骨をとつて出すものだから、魚に骨があるといふ事を知らなかつたので、宿屋で魚を食べて骨がの

どに立つたといふ事である。そんなもので、さか
人手で人まかせにしてゐると、世の中へ出てどん
損害を蒙る、不利をまねく事が少くないと思ふ。

この頃は女中が拂底で困つてゐる家庭が多いと云
ふが、それは子供に自分の事を自分でさせ、又家庭
の事を手傳はせる機會を與へるものであるから、教
育的に云へば、むしろ結構である事もある。大きく
なつたら自分でやらすと云つても、急に出来るもの
ではないから、幼時から獨立自治の精神を養ひ、な
るべく實行したいものである。

幼児の雑誌や繪本を見るにも、親や召使が頁をあ
けて見せるやうな家庭がある。さう云ふ家庭の幼兒
は、他に行つて繪本を出されても、自分であけて見
る事もしないで、人があけて見せてくれるのを待つ
てゐる。繪本に限らず、その流儀であるから、經驗
を得るにも損であるし、何か、消極的になつてしま
つて意氣地のない人間になる事もある。

日本人は自分の子を可愛いがる、日本は子供の極
樂世界である、等といふ事を西洋人が云ふことがあ
る。實際その通りで、日本人は西洋人から見ると、
子供を可愛いがり方が大きいやうである。然し、其

はむしろ愛の濫用で、必ずしも教育的ではない。例
へば、日本では小さい子供を遊ばすにも、親の干涉
が過ぎる。西洋では、あぶなくないやうな用意をし
て置いて、あとは子供の遊びまかせにして置く、子
供の一擧一動について、やれあぶないとか、それ怪
俄をするとか、一々親が口を出して干涉するやうな
事はしない。大概は知らん顔をして、子供のするま
まを見てゐる。

それで日本人の目から見れば、西洋人は餘り子供を可愛いがらぬ
やうに見えるかも知れぬが、實際はさうでなくて、教育的見地から
して、餘り干涉せず、子供のやるやうにさせて、つまりその獨立心
を養成するのである。子供はあまやかされるものほど、獨立心がな
く、意氣地がない。

それで眞に子供を愛するといふのは、たゞ子供の世話を人を雇つ
て見てやるといふのではなく、さしつかへのない限りは、大概の事
は子供自らにさせて、危険や間違に對して注意すればよいのである。
然し、いかに獨立心を養成すると云つても、まるきり子供のするが
儘に放任して置いてはいけない。手が足らぬ事を口實として、親の
すべき事もせずに置いてはいけない。幼稚園に遣入つて子供を見て
も、家庭でどう云ふ風に教育されて来たかは、大概わかるものであ
る。大勢の人手にかゝつて、何もせずに来たものかそれとも自分の
事は自分でするやうにしつけられて来たものか、よくわかる事であ
る。幼児の教育に、色々の注意もあり、注文もあるが、此處に云つた獨
立心を養成する事は、その大切なものゝ一つであると思ふのである。